

二〇一五年度 第一回

国語 (50分)

△注意▽

- (一) 開始のチャイムがなるまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから27ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

一 自分を見つめて

やさしさの時代、と言われてきた。

そこに、少し皮肉なひびきのあることが、気になる。なぜなら、そうしたなかから、「りりしさ」を求める声が、生まれやすいらだ。

ぼくの子どもの時代、ヒットラーの少年たちが現れた。それは、澄んだ瞳す ひとみの、りりしい少年たちだった。

ファシストは、澄んだ瞳で現れる。

戦後では、ファシストというと、ひどい悪人のように言われていたが、そうではない。大部分は、むしろ「いい子」だからファシストになった。

そうしたaジュンシンな子どもをだましたのが、悪いおとなのファシストかというと、それも大部分は、人のいいおじさんたちだった。

善人がファシストになること、それがファシズムというものだ。

人間というものは、りりしさに憧れる癖あが ぐせを持っている。やさしさの世界をつきぬけて、とびたいのだ。

まして、時代がそうしたものを求めて、みんながその方向へ進みはじめると、べつに時流に従おうというわけでもなく、それにひかれる。そして、みんなが進む流れのなかにあると、一種の安定があるし、その熱気が充実じゅうじつした感覚あたを与える。

人間が理性で判断をしていれば、正しい道を歩むだろう、というのは、たぶん甘いあま。少なくとも、歴史の上では、そうはならなかった。人間というのは、その場の情感のほうが、行動を定めている動物である。

群れていると、その人間同士が情感を高めあうし、^①自分自身がその群れに属していることが、自分をたしかなものにする。べつに^②キョウセイされるわけでもなく、その道の方向についての判断は、こうした自分のいる群れの論理に従うものだ。

それに、やさしさの世界よりも、一つの方向へ向けていさぎよく歩みだす、りりしきというのは、かえって進みやすい。最初の歩みに勇気がいりそうだが、「勇氣」ということばの感覚さえが、歩みへの力になる。

それにくらべると、やさしさの世界で暮らしつつづけるのは、むしろ A ことだ。それは、おたがい情感を探りあい、そして情感というものは、ときには複雑にからまりあうからだ。ひとは、それをほぐしながら生きねばならない。

それよりは、りりしさに憧れて、一つの方向へとびたつほうが、さっぱりしている。それで、^②やさしさの時代には、しばしば、りりしきへの誘惑があるものだ。

しかし、いまの時代、りりしきへ向けてとびたつのは、抑えてほしい。やさしさの世界に生きつつづけることのほうが、大事なことなのである。そして、辛抱つよさのいるものである。その辛抱のなくなったときに、ファシズムはやってくる。

ここで、ファシズムとっているのは、集団の意志が自分の意志のかわりをする事、ぐらいに考えておいてよい。集団が考えるように自分が考える、というのは嘘なのだが、そのように自分をだますと、とても安心していられるようになる。

人間というものは、他人をだますためには、いろいろと手練手管がいるけれど、自分をだますほうは、簡単にやってのける。そして、いつも自分をだまさないようにと、自分を見つめつつづけるほうが、ずっと A ことである。

このごろの子どもは自分のことしか考えない、などと言う人がいるが、自分のことを考えたいというのは、本当はくたびれるものだ。自分について考える機会を、いまの社会はうばっているというのが、むしろ本当だろう。だからぼくは、きみたちにはまず、自分のことを本当に考えてほしい。

自分のことを考え、自分を大事にすることを、悪いことのように言う人がある。本当に自分のことを考え、本当に自分を大事にすることは、人間にとっては、なにもまして大事なことだ。

本当に自分を大事にする人間は、他人を粗末そまつにしたりはしない。なぜなら、他人は自分のためであって、その他人を粗末にすると、自分にとって損になるからだ。

本当に自分を大事にする人間は、社会を無視することはない。なぜなら、自分は社会のなかであって、その社会を無視しては生きていけないからだ。

そうして、人間たちがそれぞれ、自分をなにより大事にしながら暮らしていく世界、それがやさしさの世界であるとすれば、やさしさの時代とは、とてもよいことと思う。

いま、B。そうした時代なのだ。

二 C

それでも、ぼくにだって覚えがあるが、いろいろなややこしく、からまりあっているよりは、一つの方向にむかってびしっと、きまりがついたほうが、いさぎよいという思いがある。とくに、少年期を終わろうとする不安定な時期には、そうした気持ちのあるものだ。

しかし、人間が生きていくというのは、本来がややこしいものだ。これはべつに、世なれたおとなの言葉として、言っているわけではない。「世なれたおとな」なんてものは、人間のややこしさをやりすごす術すべを身につけているだけのことであって、それはそれで単純ともいえる。

ややこしい状態に身をシヨすためには、なにより精神のしなやかさがある。そして、精神がもつとしなやかになれる可能性は、これも若さのものだ。その若さが、ともすれば、ややこしさを切りすてる方向にむかうのは、悲しいことだと思う。

それに、このごろの世の中がギスギスしたせいとか、目的に向かって単純に直結するほうが、好まれる風潮がました。いや、③そうした風潮が世の中をギスギスさせている、とも思える。

たとえば、お金を払^{はら}って品物を手に入れる場合を考える。昔だと、値段もはっきりしていなかったりして、店の人といろいろと世間話をしたりしながら、さりげなく値段の交渉^{こうしょう}に入ったりする。これは考えようによっては、ひどく能率が悪い。それに、うまくすれば安く買えるかわりに、うっかりすると高く買わされるかもしれない。売り手と買い手のゲームのようところがあって、あまり

D。

いまでは、^d テイカがついていて、店の人がいるのはスーパーのレジだけぐらいになり、ときには無人の自動販売機^{はんばいき}になる。ボタンを押^おしながら世間話をするわけにもいかないし、お金を出して品物^だを手に入れることだけは、確実にできる。しかし、なにかむなし^{しい}。

このごろの遠足では、目的地へ向かって、ひたすら急ぐ、という話を聞く。喋や花を追ったり、景色を眺^{なが}めたり、ときにはわき道へ入ったりすることをせず、もっぱら目的地へ向かう。コースはきまっていて、迷^{まよ}う楽しみは奪^{うば}われている。

そして、大急ぎで目的地についてしまえば、目的を達したという満足感^{まんぞくかん}はあっても、それもむなし^{つか}く、ああ疲^{つか}れたなど時間をもてあましたりする。

その昔、おとなに叱^{しか}られながらも、子どもは道草をするものだった。交通事故の危険などもあって、道草がなくなることによって、学校への^e オウフク^えという目的だけが、確実に行われるようになった。

いまさら時代ばなれたのを覚悟^{かくご}して言えば、道草を楽しんでいるうちに、目的地についてしまうようなのが、ぼくは好きだ。市場へおしゃべりに行って、ついでに買い物をしてしまうようなのが好きだ。目的以外のややこしいことを楽しんでいて、目的はその結果^{けつ}のようなのが好きだ。

学校へ行くのは、勉強のためであって、友人関係を学ぶためではない。しかし、その目的とちがって、友人とおしゃべりを楽しむために学校へ行って、ついでに勉強もしてしまう、そんなほうが、勉強だつて楽しくできるように思う。

勉強のきらいな人間も多いだろうが、勉強そのものを目的と考えれば、それはかえって、友人関係なんかより単純といえる。相手

の気持ちを考えたり、感情を含めてのやりとりで気をつかうなんて、とてもややこしいことだ。それよりは、勉強のほうはずっと単純である。それでも、その単純な勉強はきらいでも、ややこしい友人関係を、めんどくさがりながらも、けっこう楽しんだりする。どうもぼくには、勉強のほうは目的が単純になりすぎて、それで楽しんでいる暇がなく、楽しくないから嫌いになり、嫌いになるからできなくなり、できないからお嫌いになる、なんてこともあるような気がする。

それでぼくは、目的に向かって一直線というよりは、多少は目的に達するのがおくられても、適当にわき道に入り、その道草を楽しんでいて、結果的には目的に達してしまうほうが、結局は楽しくて得ではないかと考えている。目的に達するコースが短いより、途中にいろいろとややこしい挿話をはさんだほうが、楽しい道行きになりそうに思うのである。

それは、あまりきつぱりしてはいない。いろいろと、面倒なこともある。道に迷わないようにせねばならない。しかし、それ自体が楽しみになりうる。目的をとげた楽しみより、むしろ深みのある楽しみになる。

④ 目的への道で、ややこしいことを排除していくと、こうした楽しみがへって、その行程が楽しくなくなるので、結局は損になるように思う。

三

F

ある中学へ行くと、教室に「掃除をさぼらないように」とあって、「さぼる人がいると、他人に負担がかかり、他人の人権をおかすことになります」と書いてあった。⑤ ぼくは、とてもいやな気がした。おおげさだね、まったく。それに一方で、「働くよろこびを」なんて言うんだもんね。

サボりをまったく許さないクラスというのは、むしろこわい。それで、たまにさぼる人間が少しだけいるほうが、かえってクラスの雰囲気はよくなる。なるうことなら、それが入れかわっていくほうがよい。

自分がさぼっていないとき、サボリのためにたくさん働かされてるなんて考えるより、そのうち自分がさぼることもある、と思っ

ていたほうが、気持ちにゆとりが持てる。実際にはさぼる機会が来なくても、そうした気分であるほうが気持ちがいから得だ。

それに、実際のところは、少数のサボリがいても、残りへの負担はたいしたことではない。あいつがさぼってるのに、おれが働くのは損だなどと考えるものだから、サボリが増えていつて収拾しゅうしつできなくなるのだ。また、残りの人間がそうしてサボリを包みこんでいれば、彼はかれこの次には、他の人間のサボリを包む役になることもある。

もちろん、働くほうにまわることの多い人間と、さぼるほうにまわることの多い人間とが、できてはくる。それは不公平だと、Gよりは、おたがいに気持ちよくつきあつたほうが、たぶんよいクラスができる。公平ばかり考えて、みんなが一律にきゅうくつになるより、ずっとよい雰囲気になるだろう。

だいたい、人間がケシカランと言っているときは、自分自身がどれだけ損害を受けているか考えると、たいしたことでないが多い。損害を受けているときは、ケシカランなどと言う前に、損害を回復する方策を考えるものだ。

それで、⑥ケシカラン主義者は、たいていオセツカイになりやすい。自分の直接的な被害ひがいというより、みんなが働いているときにサボリのおるのはケシカランと、わきから言ったりする。

しかし、それはやはり、自分が関係はしている。いまの場合でいえば、クラスのみんなが平等に働かねばならない、という思いこみがあつて、それに反するのがゆるせないのである。それは、自分の考えに反するからだ。

昔でいうと、みんながお国のために働いているとき、国なんかより自分のほうが大事だと考える人間は、非国民といわれたものだ。クラスの人間が掃除に熱中しているとき、それをさぼる人間が存在すること自体がゆるせん、というわけである。

しかしぼくは、クラス全員が熱中したりするより、一人や二人はそれにH人間がいたほうが、クラスの雰囲気が一方向にこりかたまらないと思う。異端いたんをかかえこむことこそ、集団にはなにより必要なのである。

クラスのほとんどが、ある方向に向いているとき、それにそっぽを向く人間の存在は、とても大事なものである。べつの方向のあることを気づかせたり、一方向に進むのにブレーキの役わりを果たす、とても大事な人間なのである。それは、少しもケシカランこと

ではない。

自分とちがった考えを持つ他人がいるというのは、とても貴重なことだ。人間は、一つの考えを持つと、その考えにこりかたまりやすいので、それをほぐすためには、違う考えの人間がいたほうがよい。

⑦ このことを知るのは、少年期では、とても大事なように思う。最初は、自分の考えを持ちはじめると、それと違う他人の存在がゆるせないように、思いがちだ。それが、違う意見の他人の存在の意味を感じはじめるのは、中学生あたりの時期からだろう。だから、ケシカランと言うまえに、こうしたことを考えるのが、とても大事な時期なのである。

もしも、やさしさなどと言っても、同じようなものばかりが群れあつて、おたがいをなぐさめあっているのでは、つまらないことだ。自分と違う人間、自分と違う考えとの間で、心をおかわすのが、やさしさなのだ。

だから、異端を包みこむことなしには、やさしさなどといっても、あやしい。一見はとても「やさしい」心の持ち主たちが、自分の仲間以外にたいしては、ひどく残酷ぶんごになつたりした例は、歴史上もよくあつた。仲間同士ではなく、仲間からはみだしている人間に心をおかわすなかに、やさしさはある。

自分の尺度とくいちがうことを理由に、ケシカランとは言うまい。むしろ、くいちがった尺度の組みこまれた場、それは一つの尺度よりはやくこしくても、そうした場に生きていこう。

【問1】

①「ジュンシン」、②「キョウセイ」、③「シヨ（す）」、④「テイカ」、⑤「オウフク」のカタカナを漢字に改めなさい。

【問2】

①「自分自身がその群れに属していることが、自分をたしかなものにする」とありますが、その具体的な例として適当なものを次の中から2つ選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。

(ア) 私はサッカー部の主将だ。毎日10キロの走り込みから始まる厳しい練習の帰り道、部員のほとんどは行きつけのお好み焼き屋に立ち寄るのだが、私は誘いを断ってスポーツジムに通っている。誰よりも強く、速く動ける肉体を目指して日々努力した結果、私は自分の身体に並々ならぬ自信を持てるようになったのだった。

(イ) 私は野球部に所属しているがレギュラーになれずにいた。そんな私が部員同士の話し合いで意見を言っても支持してくれる人は誰もいなかった。しかし、ある日、私が野球部の主将と大喧嘩をしてから、皆が私に気を遣うようになった。皆が私を支持することが増えるにつれて、私は自分に自信を持てるようになったのだった。

(ウ) 僕は中学一年生のとき討論大会に出場した。練習では、常に皆が相手を言い負かそうとするので、毎回必ず泣く者が出た。初めの頃は泣かされていた僕も、いつしか相手を言い負かす方法を身につけた。そのおかげか、当日、僕は自分の意見を自信をもって主張できた。討論大会に出場した自信はその後僕を支えてくれるのだった。

(エ) 僕は東京で暮らしているが、鹿児島生まれ鹿児島育ちの人間だ。東京で生活を始めてまもなくは、方言が通じないことや、郷土料理が食べられないことで気が滅入っていたが、鹿児島出身者が集まる会に所属してからはその不安がなくなった。同じ故郷を持つ人々と時間をともにしていると、僕は自分に自信を持てるようになったのだった。

(オ) クラスで合唱曲を決めたときのことだ。「空」という曲を選んだのは、私とクラスで一目置かれているA子だけだった。それ以来、私はクラスで発言力のあるA子のグループと共に行動するようになった。A子たちというと、私はクラスにおける自身の存在感が増していくように感じられるとともに、自分の意見に自信を持てるのだった。

【問3】

A

D

E

に当てはまる語句として適当なものを次の中からそれぞれ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

(ア) 気が利く (イ) 気のはる (ウ) 気をつかう

(エ) 気がおけない (オ) 気がとがめる (カ) 気をゆるせない

【問4】

②「やさしさの時代には、しばしば、りりしさへの誘惑があるものだ」とありますが、筆者の考える「やさしさ」と「りりしさ」の説明として適当なものを次の中から2つ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) 「やさしさ」とは、集団が一つの方向に進んでいるときに、別の方向を向く異質な人間を許容することである。

(イ) 「やさしさ」とは、様々な事ことばがらに対して理性的な判断を下すことで、より正しい道を歩んでいくことである。

(ウ) 「やさしさ」とは、情感が複雑にからまりあう社会で、自分の考えよりも集団の考えを優先させることである。

(エ) 「りりしさ」とは、自分の意志と集団の意志を同一視し、全体で一つの方向にいきさぎよく歩みだすことである。

(オ) 「りりしさ」とは、正しさについて勇氣を持って発言し、自分自身の力で充実した感覚を生み出すことである。

(カ) 「りりしさ」とは、澄んだ瞳ひとみを持つ人々ひとびとが、時流に従う中で自分について真剣しんけんに考える機会を持つことである。

【問5】

B

にあてはまる文としてもっとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) やさしさに寄りかかっているとはいけない
- (イ) やさしさの言いなりになってはいけない
- (ウ) りりしさを求めてとびたつてはいけない
- (エ) りりしさをから脱け出そうとしてはいけない

【問6】

C

F

にはその章のタイトル(見出し)が入ります。適当なものを次の中からそれぞれ選び、(ア)

～(エ)の記号で答えなさい。

C

- (ア) ややししさの征服せいふく
- (イ) ややししさのすすめ
- (ウ) ややしさを乗り越こえる
- (エ) ややしさをよりいさぎよよさ

F

- (ア) ケシカランとは言うまい
- (イ) ケシカランから生まれる平等
- (ウ) ケシカランはやさしさである
- (エ) ケシカランがよいクラスを作る

【問7】

——③「そうした風潮」とありますが、どのような「風潮」ですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 人間が生きていくうえで解決しなければならない問題を論じる時、多くの人々が問題点を指摘できずに、相手の意見にあわせることにばかり力をそそいでしまう風潮。

(イ) 今後進むべき方向を決定しなければならぬ時、多くの人々が目的に向かって突き進むこともせず、また満足感を味わえない状況を改善する気持ちさえ持てない風潮。

(ウ) 話し合いの中で自らの考えを相手に伝える時、多くの人々が自身の考えを冷静にまとめられないどころか、独自の考えなどどこにもないのだと思いつ込んでしまう風潮。

(エ) 人間関係におけるわずらわしさを前にした時、多くの人々がそれに直に向き合おうともせず、また回避させずに、厄介な状況など存在しないかのようにふるまう風潮。

【問8】

——④「目的への道で、ややこしいことを排除はいじょしていくと、こうした楽しみがへって、その行程が楽しくなくなるので、結局は損になるように思う」とありますが、筆者が言う「ややこしさ」とはどのようなものですか。次の説明文の(1)～(4)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

「ややこしさ」とは辞書で調べると、「込み入こみいっていること」、「複雑なこと」とあります。筆者の言う「ややこしさ」とは、社会において人々がコミュニケーションをはかる際に向き合うことになる互いの込み入なった感情、または複雑な心の動きと考えるとよいでしょう。私たちは生きていく中で、常に互いの気持ちや意見にぶつかり、そうした時に相手の気持ちを想像し、思いわずらったりします。相手に対するこうした配慮はいりよが「ややこしさ」を生み出すのです。昨今では人々は、自分と考えの異なる相手とコミュニケーションをはかったり、分かり合おうとしたりする機会を自ら放棄ほうきしがちなようです。

さらに、筆者によると、最近(1)

- (ア) 目的を交渉相手にあわせて変える
 - (イ) 目的以外のことを楽しみながら進む
 - (ウ) 目的に向かつてひたすら急いで進む
- ことが好まれる傾向けいこうがあります。

しかし、筆者は遠足を例に挙げながら(2)

- (エ) 目的と異なることを楽しむついでに目的が達成されること
- (オ) 目的を成し遂げるか否かを判断するための時間を持つこと
- (カ) 目的の達成に多少時間がかかっても最後まで諦めあきらめないこと

を勧めます。なぜなら、こうした経験によって、人は一つの方向にだけ向かうような生き方ではなく、

(3)

- (キ) ややこしい状態をそれぞれに整理し、いさぎよさを身につけられる
- (ク) ややこしい状況を解決せずに、上手にやり過ごす方法を見つけれられる
- (ケ) 様々なややこしい状況に応じて、自身の態度を決められるようになる

からです。

忙しい現代において、人々は効率的な生活を手に入れることに力を注いでおり、筆者が主張するように行動することは難しいかもしれません。

しかし、(4)

- (コ) 目的を達成する際に効率性を重んじると、目的に至るまでに様々な経験ができず損をする
- (サ) 生活の効率化が人間関係のわずらわしさを解消し、目的までの道筋を穏やかなものにする
- (シ) 効率的に物事を考えることで多くの目的を遂げられるが、満足感を得ることはできない

と筆者は主張します。「ややこしさ」と向き合うことは、人々が生きていく上で重要なものなのです。

【問9】

——⑤「ぼくは、とてもいやな気がした」とありますが、どういうことですか。もつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 難解な言葉を使った標語はクラス全員に理解されることが難しいため、サボリの根本的な解決にはつながらないことに筆者が違和感を覚えたということ。

(イ) 一見もつともらしい標語ではあるが、サボりを包み込むゆとりをクラスから奪い、窮屈な雰囲気をもたらししてしまうことに筆者は不快感を覚えたということ。

(ウ) サボりを禁止する標語は働いている人々を威圧することになり、結局はさぼる人間が固定化してしまう状況が生まれることに筆者が拒絶感を覚えたということ。

(エ) サボりの問題は人権の問題につながっているとすると主張が、真面目に掃除をする子供たちの人権については言及していないことに筆者が嫌悪感を覚えたということ。

【問10】

G

H

にあてはまる慣用句としてもつとも適当なものを次の中から選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) 息を呑む

(イ) 舌を巻く

(ウ) 腕をあげる

(エ) 背を向ける

(オ) 肩を並べる

(カ) 目にかどたてる

【問11】

——⑥「ケシカラン主義者」とはどのような人のことを言っているのですか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)

ㄱ (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 集団の意向に反する人が損害を受けたときは、その人の味方をするとともに、集団を構成する人々をやさしく教え導く人。

(イ) 自分自身はたいした損害を受けていないのに、自分の考えを押し付け、異なる意見を持つ者を許さない態度を取っている人。

(ウ) 自分の意見を否定する人がいた場合、自分の主張の正しさをわかってもらうために、対立する人と話し合おうと努力する人。

(エ) 公平さに欠ける状況を見てとり、あたかも自分の信念であるかのように平等を主張することで、誰からも好かれようとする人。

【問12】

——⑦「このことを知るのは、少年期では、とても大事なように思う」とありますが、それはどうしてですか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア) ㄱ (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 感受性が育まれる少年期は、自分というものが強く意識されるゆえに、自己主張が強くなる時期でもあるから。

(イ) 協調性が育つ少年期は、自己中心的なふるまいを自ら禁じ、周囲の顔色を伺うことを覚える時期でもあるから。

(ウ) 正義感あふれる少年期は、物事の善悪を明らかにすることにばかり力を注ぎ、視野が狭くなる時期でもあるから。

(エ) 自立心が高まる少年期は、周囲の大人に対して不信感を持つ上に、自分自身も信用できなくなる時期でもあるから。

【問13】

筆者の意見や考えとして適当なものを次の中から2つ選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) ファシズムの世界とは、少年期の子どもにとって魅力的なものだ。彼らは仲間と団結し、友情の中で勇気を育み、困難に立ち向かう。初めは異なる考えを持つ者同士でも、話し合い、一つの目標を共有することで連帯感と自信を獲得する。こうした経験を繰り返すことで、少年たちは人間的に大きく成長し、澄んだ瞳を持つ大人になるのだ。

(イ) 歴史上、残酷な事件はたいがいファシストによって起こされている。彼らは群れを作ることを目的にしているため、常に結束を強めるための生け贄を必要としているのだ。彼らは生け贄となるはみ出し者を目ざとく見つけては攻撃を繰り返すし、群れを巨大化していく。現代社会ではこうしたファシストを撲滅することが求められている。

(ウ) かつては買物の際に店の人と値段交渉をしたものだ。品物の値段は売り手の気分によって変わったので、コミュニケーションにたけた者が得をした。今では、品物の値段はどこに行っても同じなので不公平はなくなったが、学校においてはいまだに会話下手の人間が損をする。それゆえ、我々は教育現場の改善を図る必要がある。

(エ) 子どもたちが学校に行く理由は勉強のためではなく友人関係を育むためであるが、それ以外のことを楽しむのも大切である。このことを子どもに伝えれば、彼らは自主的に道草をするようになり、目的に向かってひたすら急ぐということもなくなるだろう。子どもたちが学校生活に満足するように、大人は日々努力すべきである。

(オ) クラスには、一人や二人掃除を怠ける者がいてもよい。怠け者のせいで自分が損をしていると考えたとクラスはピリピリとした雰囲気になってしまいうから、自分にもさぼる日が来るかもしれないと考えて怠ける者に対応する方がよいだろう。皆が一樣に公平さを追求するクラスよりも、そうしたクラスの方がよい雰囲気になるのだ。

(カ) 昨今の人々は自分と異なる尺度を持つ人とは交流しない傾向がある。しかし、自分と同じ尺度で考える人だけ群れるならば、いつしかそれは絶対的なものとなり、異なる尺度に対してはますます不寛容になるだろう。その結果、戦時中のような悲劇が起こるのだ。それゆえ、異なる尺度を持つ人々と共存できる場を作ることが必要である。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

「そんな端を歩くと危ないぞ」

ケン坊がうしろから言った。川幅は、このあたりで少し広くなる。あと何キロか下ると海だ。河口から飛んできたカモメが向こう岸の工場の屋根にとまっている。ケン坊はわたしのみつあみの片方を軽く引っぱった。

「いたいよ」とわたしが言うと、ケン坊はかすかに笑った。家に帰ってきてから、ケン坊はかすかにしか笑わなくなってしまった。昔はあんなにふわっと大きく笑ったのに。

「犬の紐がわりだ」そう言いながら、ケン坊はもう一度みつあみを引っぱった。カモメが高く鳴いた。平たい石をひろって、わたしは水面に投げた。石は一つだけ水を切って飛び、すぐに沈んだ。

「少し、できるようになったな」言いながら、ケン坊はわたしの横に来て並んだ。わたしがおもいきり背伸びをしても、ケン坊の胸までしか届かない。ケン坊はその大きなてのひらにちょうどいい大きさの石をのせて、ぐっと肩を落とした。そのまますいと石を投げる。石は水面を何回も切って、向こう岸に近いところまで飛んだ。

「すごいね」わたしは言ったが、ケン坊は少しまばたきをしただけで、無言のまま岸に腰をおろした。わたしもケン坊の隣に座った。ケン坊は、しばらく川の流れを見ていた。わたしもまねして川の流れを見た。① ずいぶん長い間、ケン坊は川を見ていた。

ケン坊はとつくに成人しているが、近所の人たちはみんな今も「ケン坊」と呼ぶ。賢太郎という本名でケン坊のことを呼ぶのは、よその人だけだ。何年か前に母が切り抜いた新聞には、「進藤賢太郎一位指名」という文字があった。

「それなに」と母に聞くと、「ケン坊のことが新聞に載ってるんだよ」と母は答えた。

「何か悪いことでもしたの」わたしが驚いて聞くと、母は笑った。

ケン坊は、高校在学中にプロ野球の投手として球団に指名されたのだ。指名だのプロだのという言葉の意味が、そのころのわたし

にはわからなかった。入団の四年後、ケン坊は練習中に利き腕を怪我した。数ヶ月後に新聞に載った「進藤、自由契約に」という言葉の意味を、もうわたしは理解できるようになっていた。「キャンプ」だの「遠征」だので家に居つかなかつたケン坊が家に戻ってきたのは、それからしばらくしてからである。

② 帰ってきたケン坊は、めつたに家から出なかつた。ケン坊のところのおばさんは、わたしの家に来ては母に何かと相談した。ときおり、おばさんが話の途中で泣きだしてしまふこともあつた。そういうとき母は台所から厚く切つたようかんの皿を持ってきて、おばさんに勧めた。甘いもの食べると、気が落ち着くよ。③ 人間万事塞翁が馬。そんなことを母は言いながら、ようかんをしきりに勧めた。

ケン坊のおばさんは、そのうちあまり泣かなくなり、ケン坊もときどき川の土手を散歩したりするようになった。ケン坊ががらり戸を開ける音をききつけると、わたしはいそいで玄関に走り、サンダルをひっかけ、ケン坊の後を追いかける。大きなケン坊ががらり戸を開ける音は、ケン坊のところの小柄なおばさんがたてるびしゃびしゃした音よりも、よつぽどやさしく響いた。

「なあ、春子」ケン坊が言った。ケン坊に、春子、と呼びかけられると、いつもわたしのおなかのあたりは、とくんとくんとなる。温水プールの水みたいになまあたかいかい何かが、おなかの中に満ちてくる。

「なに」わたしは A 答えた。ケン坊にわたしのおなかの中に満ちてくるものの存在を、決して知られたくなかつた。ケン坊だけではない、母にもケン坊のおばさんにも担任の雅代先生にも親友のキョウコちゃんにも、誰にも知られたくなかつた。知られたとたんに、それはわたしの体のどこかにある見えない栓からしゅうつと流れ出て、あとかたもなく消えてしまふような気がした。

「たい焼きでも食うか、それともアイスにするか」

アイス、と B 答えて、わたしはケン坊の先に立つた。アイスならば、「稲や」のおぐらアイスだろう。ケン坊はゆつたりとした大股で、わたしの後をついてくる。川と並行する道ぞいに「稲や」はある。町工場や文房具の間屋や小さな商店がぼつぼつと並ぶ、狭い通りである。「村山紙工」という字を横腹に書いたトラックが、わたしの目の前をぶうんと通りすぎた。このところ雨

が降っていなくて、道は少しほこりっぽい。角のお稻荷さんに、緋寒桜が咲いていた。

「春子、あぶないな、もっと端を歩け」ケン坊が言った。

「さつきは、端を歩くなって言った」わたしが答えると、ケン坊はわたしの頭のとっぺんをてのひらではたいた。

④ 頭たたかないでよ、ばかになるから、と言いながらわたしはケン坊の腕につかまった。そのままケン坊の腕にぶらさがるようにして、通りを歩いた。わたしはいちいちどの店の前でも立ち止まった。ケン坊もしばらくわたしにつきあって止まるが、すぐに歩きはじめ。早く来い、といいながら、わたしのセーターを引っばる。

「ほんとに犬の散歩だな、春子と歩くのは」ケン坊は言つて、空を見上げた。見上げるケン坊の頬のあたりが、削げている。

⑤ ケン坊、とわたしは呼びかけようとしたが、ケン坊のまなざしがあまり静かすぎて、呼びかけられなかった。

通りのはずれに釣餌屋があった。「いい赤虫あります」だの「ぶどう虫分けます」だのと書いた手書きの札が窓ガラスに貼りつけられている。わたしが札を読んでいると、ケン坊は「おっ」と声を出した。

「水かまきりがいるよ」

店の前にたらいが置いてあって、中に肢の長い昆虫がいた。何種類かの藻が漂う水の面に、ふわりと浮いている。

「水かまきりっていうの、これ」

「今どき珍しいなあ」

そのままケン坊はじつと水かまきりに見入った。水かまきりは、ぜんぜん動かなかった。たらいを手で揺らしても、ただ浮いているばかりだ。

「死んでるのかな」わたしが聞くと、ケン坊は「死んでるのかもな」とゆっくり答えた。

ケン坊のまなざしが、さつき空を見上げていたときと同じように、いやに静かだ。たらいはいくつかあって、ほかのたらいには、透き通った小さなえびや小魚が何匹かずつ泳いでいる。

⑥ 「ケン坊」わたしは小さな声で言った。わたしのすぐ横でしゃがんでいるケン坊の体温が、隣のわたしに伝わってくる。ケン坊はいつも大きくてあたたかい。ケン坊は、じつと水かまきりのたらいを見つめていた。

「ケン坊、アイス食べに行こう」わたしが言うと、ケン坊は立ち上がった。もう一度空を見上げ、少しため息をついて、歩きはじめようとした。

「あ、水かまきりが」

わたしは声をあげた。水かまきりが、水面から水中に沈もうとしていた。長い肢を静かに動かし、尻からつき出た棒のようなものを水面にたてて、水かまきりは D 水の中を泳ぎはじめた。

「お」ケン坊も声をあげた。

「生きてるなあ」

「生きてるねえ」

ケン坊とわたしは顔を見あわせた。水かまきりはゆっくりと底まで沈み、それからふたたび水面上がってきた。風が吹いて、たらいの水をかすかに揺らした。よし、とケン坊は小さくつぶやいた。よしよし、生きてたんだな。小さく強く、ケン坊はつぶやいた。

⑦ 「春子、行くぞ」そう言って、ケン坊はどんどん歩きはじめた。わたしはケン坊のあとをあわてて追った。春の暖かな風が、ケン坊の短い髪をそよがせる。稲やの前まで、ケン坊はひといきで歩いた。

「おぐらアイス、二個ずつ食うか。」ケン坊は言って、笑った。久しぶりに聞く、ケン坊のふわっとした大きな笑いだった。

うん、二個ずつだね。⑧ なんだかわからないけれどわたしも嬉しくなっていて笑いながら、答えた。ケン坊は店の奥に向かって、おぐら四本ね、と大きな声で言った。風が、稲やの前に植えてあるおもとの葉を、揺らした。

【問1】

① 「『ずいぶん長い間、ケン坊は川を見ていた』とありますが、これに続く出来事を表している一文を抜き出し、はじめの5字で答えなさい。

【問2】

② 「帰ってきたケン坊は、めったに家から出なかった」とありますが、次の文の [a] [c] [d] にあてはまる語を選び、(ア) (イ) (シ) の記号で答えなさい。

自由契約となったことは、ケン坊の人生における大きな [a] であつたと言えよう。故郷に戻つたケン坊は、自分の未来への [b] がつかなくなり、人間関係にも [c] を感じて、 [d] になつてしまつたの
だろう。

- | | | | |
|------------|-------------------------------|------------|------------|
| (ア) こだわり | (イ) みとおし | (ウ) よろめき | (エ) つまずき |
| (オ) あきらめ | (カ) 遠慮 <small>えんりよ</small> がち | (キ) とぎれがち | (ク) ひっこみがち |
| (ケ) たどたどしさ | (コ) みすぼらしさ | (サ) わずらわしさ | (シ) うさんくささ |

【問3】——③「人間万事塞翁が馬」とありますが、この発言にみられる「わたし」の母の思いとして、もっとも適当なものを

選び、(ア) (エ) の記号で答えなさい。

(ア) 確かにケン坊の境遇はともかわいそうだけれど、悪いことが起きる時にはさらに不幸が降りかかることもあるから、母親のあなただけではしつかりしなくてはならないよ、と気づかっている。

(イ) あなたはケン坊のことで悲観的なもの見方ばかりしているけれども、これから良い巡り合わせだつてあるのだから、母親のあなたが嘆いてばかりいない方がいいよ、となくさめている。

(ウ) 一度起きたことは二度ともとに戻すことはできないのだから、いつまでも過去の栄光にひたつていないで、母親のあなたが前向きな生き方を示さなくてはいけないよ、と勇気づけている。

(エ) あなたがケン坊を苦しみから救つてあげたいと思う気持ちはわかるけれど、ケン坊が自分で解決しなくてはいけないのだから、母親のあなたがそつと見守つてやりなさいよ、とさとしている。

【問4】本文中の

A

・

B

 にあてはまる語句の組み合わせとして、もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)

(エ) の記号で答えなさい。

(ア) A || おどおどと B || むつつり

(イ) A || さりげなく B || ひっそり

(ウ) A || うんざりして B || はつきり

(エ) A || ぶつきらばうに B || きつぱり

【問5】

④ 「頭たたかないでよ、ばかになるから、と言いながらわたしはケン坊の腕につかまった」とありますが、これに関する次の文の(1)～(3)について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ケン坊は、少し前には「端」を歩くなと言ひ、今度は「端」を歩けと言っている。どちらも

- (1) (ア) 「わたし」に対して、ゆれ動き続ける気持ちが表示れた
(イ) 「わたし」を危険な目に遭わせないように、配慮した

ものである。

(ウ) 自分の言葉を「わたし」がどう思うか、深く考えていない
一方「わたし」は、ケン坊が「端を歩け」と言ったとき、

- (2) (エ) ケン坊の態度や行動に納得することができず、反抗的な態度をとる
(オ) ケン坊の意図を理解できなくて、好意を足蹴にするような態度をとる
(カ) ケン坊の気遣いは分かっているものの、あえて拗ねたような態度をとる

。そこでケン坊は「わたし」

の頭を軽くはたいたのである。そして「わたし」は「頭たたかないでよ、ばかになるから」と発言するのだが、そう言

いながら、(3) (キ) 自分を子ども扱いするケン坊にいらだって
(ク) ケン坊の側にいられることに心が浮き立って

、「わたし」はケン坊の腕を自らとるの

だった。

【問6】——⑤「ケン坊ぼ、とわたしは呼びかけようとしたが、ケン坊のまなざしがあんまり静かすぎて、呼びかけられなかった」と

ありますが、どうしてですか。その説明として、もっとも適当なものを次の中から選び、(ア) (エ)の記号で答えなさい。

(ア) 「わたし」は、ケン坊が遠くへ行ってしまうことを予感し、彼の目の中にその決意を感じ取って、かける言葉を見つけられなかったから。

(イ) 「わたし」は、ケン坊を苦しみから救いたいと思っていたが、実際に彼の顔を見ると何も言葉をかけられず、自分の無力さを痛感したから。

(ウ) 「わたし」は、ケン坊にこれまでとは異なる雰囲気を感じ、彼の中に触れてはいけない何かがあることを察知して、ためらいを覚えたから。

(エ) 「わたし」は、すぐそばにいるケン坊に、思わず自分の気持ちを打ち明けそうになったものの、ケン坊のまなざしに気後れしてしまったから。

【問7】本文中の

C

・

D

 にあてはまる語句の組み合わせとして、もっとも適当なものを次の中から選び、(ア)

(エ)の記号で答えなさい。

(ア) C ≡じつと D ≡ゆらゆらと

(イ) C ≡さつと D ≡ふわふわと

(ウ) C ≡ぼつと D ≡ぐんぐんと

(エ) C ≡ふつと D ≡おどおどと

【問8】——⑥『ケン坊』わたしは小さな声で言った」とありますが、どういうことだと考えられますか。もっとも適当なものを次

の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 好きだった水かまきりに無関心な態度をとるケン坊に違和感いわかんを覚えた「わたし」は、「ケン坊、おかしいよ」という意味で、声をかけた。

(イ) 水かまきりの死を悲しんでいる様子のケン坊をかわいそうに思った「わたし」は、「ケン坊、元気を出して」という意味で、声をかけた。

(ウ) 水かまきりばかり見ていてうわの空の様子のケン坊に不満を覚えた「わたし」は、「ケン坊、もういこうよ」という意味で、声をかけた。

(エ) 動かない水かまきりを見ているケン坊の態度に不可解なものを感じた「わたし」は、「ケン坊、どうしたの」という意味で、声をかけた。

【問9】

——⑦『春子、行くぞ』そう言って、ケン坊はどんどん歩きはじめた」とありますが、これに関する次の説明文の(1) (3) について、適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

故郷に帰ってきた後、ケン坊は、(1)

(ア) 感情の起伏が激しくなる傾向にあった
 (イ) あまり感情を表にあらわさなくなった
 (ウ) 以前と変わらぬ様子でふるまっていた

。家にこもりがちになっ

ていたケン坊だったが、しばらくして外出するようになる。

そんなケン坊にとって、「わたし」と見た水かまきりの姿は、印象深いものであったようだ。その水かまきりが動き

始めたのを見て、(2)

(エ) ケン坊は気力を取りもどしていくようであった
 (オ) ケン坊は昆虫にも劣る自分を恥じたようであった
 (カ) ケン坊はあきらめて現実を受け入れたようであった

。その後立ち上がったケン坊

は、(3)

(キ) 高校卒業後初めて、自らの意志で行動を決めるようになった
 (ク) 帰郷直後の様子とは異なる、能動的な姿を示すようになった
 (ケ) これまでの自分の行動を見つめ直し、過去をやり直そうとした

のである。

【問10】

——⑧「なんだかわからないけれどわたしも嬉しくなつて」とありますが、どうして「わたし」は嬉しくなつたと考えられますか。もっとも適当なものを次の中から選び、(ア) (オ) の記号で答えなさい。

(ア) 「わたし」には、最後までケン坊が心の底で何を考えているのかがい知ることではできなかった。しかし、ケン坊の表情や様子を側でじつと見つめてきた「わたし」は、ケン坊の気持ちが動き出したことを感じ取り、ケン坊の

思いの一端いったんに触れるふことができたような気がしたから。

(イ) 「わたし」には、この時、急にケン坊の機嫌きげんが良くなった理由を想像することはできなかった。けれども、それまでケン坊の態度や発言に対しておびえに近い感情を抱いだいていた「わたし」は、ケン坊の気分が変化したことにより、一時でも平穩へいおんを味わうことができると感じたから。

(ウ) 「わたし」には、どうしてケン坊が急に明るくふるまい始めたのか理解できなかった。しかし、積極的に「わたし」を店に連れていき、好物をたくさん食べさせようとしてくれるケン坊の行いから、ケン坊が落ち込おこんでいる自分を喜ばせようと気づかっていたことを知ったから。

(エ) 「わたし」には、何がきっかけになってケン坊が立ち直ることができたのか分からなかった。けれども、ケン坊が再び世の中に出て挑戦ちょうせんしていこうと決意をかためているのを直感した「わたし」は、自分だけがケン坊のその思いを共有こうゆうしているという事実を誇ほこらしく思ったから。

(オ) 「わたし」には、ケン坊が自分に向かって笑いかけてきた意図を読み取ることはできなかった。しかし、これまで自分に対して無関心であったケン坊が、この時ばかりは温かく接してくれたため、ケン坊を慕したう「わたし」の気持ちかれが彼に届いたのではないかと感じたから。

【出典】

〔Ⅰ〕 森 毅 『まちがったっていいじゃないか』（ちくま文庫、一九八八年）より。

〔Ⅱ〕 川上弘美 「水かまきり」 『ハツキさんのこと』（講談社文庫、二〇〇九年）より。

